

# 「大母音推移」の英語教育上の役割を再検討する

(近年の研究動向を踏まえて)

堀田 隆一 (慶應義塾大学)

abstract: 大母音推移は英語史で最もよく知られている体系的な音変化の1つであり、英語教育の観点からは、綴字と発音の乖離という悩ましい問題に対する有力な処方箋として活用されてきた経緯がある。例外的な側面も含まれおり、万能な処方箋とはなり得ないことは前提だが、信じられている以上に多くの重要な例外があり、その活用範囲には注意する必要がある。さらに、近年の英語史の研究動向として、大母音推移という過程そのものに対して懐疑的な見解が出されていることにも留意したい。

キーワード: 英語史, 大母音推移, 音変化, 正書法, 綴字と発音の乖離

## 1 大母音推移の概要

英語史において生じてきた数々の音変化のなかで、最もよく知られているものの1つに大母音推移 (Great Vowel Shift) がある。1400~1700年頃に体系的に生じたとされる一連の長母音の変化をまとめて指すべく Jespersen が初めて導入した用語である。以後、その構造的美しさ、様々な理論的解釈、綴字と発音の問題への示唆などに注目が集まり、大母音推移は、英語史はもちろん音韻論や英語教育など関連分野の研究者を魅了し続けてきた。

大母音推移で生じた一連の母音変化を要約すれば「各長母音が1段階舌の位置を上げた」といえる。ただし、もともとの高母音はそれ以上舌を上げることができないために、2重母音へ変化した (図1参照)。また、前舌母音系列においては /ɛ:/ → /e:/ → /i:/ のように2段階上がった。

このように発音は大規模な推移を経たものの、綴字は推移前の母音を表すままにとどまったため、現代英語の観点からは、発音と綴字の間に

一定のズレがあるように見えることになった。大母音推移以後、現代までに若干の追加的な音質の変化が生じたために、必ずしも図示した通りの対応関係にはならないが、現代英語からの典型的な単語例を挙げれば、綴字 <a> に対して母音 /eɪ/ が対応し (ex. name), <ea> や <ee> に /i:/ が (ex. meat, meet), <i> に /aɪ/ が (ex. fine), <oa> に /oʊ/ が (ex. goal), <oo> に /u:/ が (ex. food), <ou> に /aʊ/ が (ex. house) がそれぞれ対応する結果となった。

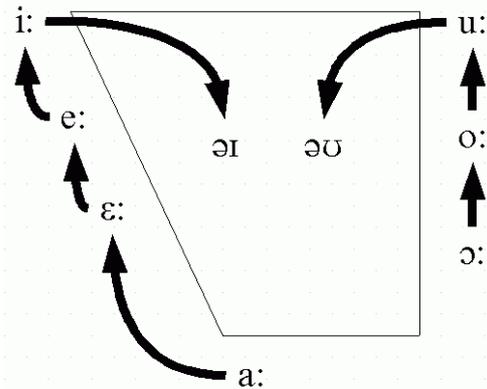


図1  
大母音推移

## 2 大母音推移の例外

このように大母音推移によって生じた綴字と発音の乖離は、しばしば英語学習上の負の遺産として目の敵にされてきた。しかし、むしろこの変化の規則性を逆手に取り、英語学習者に同変化の理解を通じて、乖離した発音と綴字の関係を正しくとらえさせ、さらには乖離している事実そのものに目を向けさせるという教育的な効果を見込むことができるだろう。実際、英語教育は、このように大母音推移を「活用」してきた実績がある。

しかし、一見すると構造的に美しく見える一連の母音変化も、細かくみれば例外的な事項が多く注意を要する。実際、大母音推移の理解が母音に関する綴字と発音の乖離問題に対する処方箋としてどれくらい有効であるかは、慎重に計る必要がある。注意すべき点をいくつか挙げたい。

(1) /ɛ:/ から /i:/ へ舌の位置が2段階上がったケースはそれ自体が例外的だが、/ɛ:/ から /e:/ へ1段階のみ上がった例も少数の重要語において観察される (ex. break, great, steak), (2) 大母音推移後に生じた別の音変化の結果、さらなる乖離が生じた場合も多い (ex. look, blood), (3) 唇音が隣接する環境において、予想される高母音の2重母音化が生じないことがある (ex. you, wound, poor), (4) 近代のフランス借用語においては、大母音推移の効果が現れない (ex. madame, police, group), (5) 大母音推移はあくまで強勢のある長母音に生じた変化であり、無強勢母音や短母音と、その綴字との関係には光を当てない (ex. crime/criminal, clean/cleanliness), (6) 非標準変種においては異なる様相の母音推移が展開していた。大母音推移の英語教育上の活用にあたっては、このような「例外」を意識しておく必要があるだろう。

## 3 大母音推移の解体

前節で大母音推移の活用範囲に注意を促したが、それと関連して、少なからぬ英語教育関係者にとって衝撃的に聞こえるかもしれない、大母音推移をめぐる近年の研究動向に触れておきたい。それは、近年の主流派の音韻史研究においては、「大母音推移」のようにかぎ括弧つきで言及されることが一般的となってきたことだ (cf. Stenbrenden)。従来、互いに関連する一連の母音変化であると理解されてきたものが、解体されてきているのである。

新しい「大母音推移」の解釈の主旨は、(1) 各々の母音変化は部分的には関連し合っているものの独立した音変化であり、(2) 後期古英語期から後期近代英語期にかけての長期にわたる大きな母音変化のうねりの一部としてとらえる必要があり、その一部だけを取り上げて論じることは適切ではない、ということである。背景には、文献学、歴史社会言語学、音韻論の分野における研究の進展がある。

従来、大母音推移は単純化してとらえられてきたが、実際には複雑な音変化の集合体の一部をなす。そのように考えると、前節に挙げたように種々の例外的な側面が多く見いだされることは、むしろ自然のことに見えてくる。

今後も英語教育において大母音推移は綴字と発音の問題への処方箋として活用され続けていくと予想されるし、筆者もその効果は否定しない。しかし、活用範囲を正しく理解することが求められるだろうし、すでに英語史の専門分野においてかぎ括弧つきで言及され始めているという状況は意識しておく必要があるだろう。

### 参考文献

- Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part 1. Sounds and Spellings*. London: Allen and Unwin, 1909.
- Stenbrenden, Gjertrud Flermoen. *Long-Vowel Shifts in English, c. 1150--1700: Evidence from Spelling*. Cambridge: CUP, 2016.